

全佛婦

No. 141
2025年夏号
7月10日発行



公益社団法人
全日本仏教婦人連盟

全佛婦141号

令和7年7月10日 発行日

広報委員 編集人

本多端子 発行人

発行所

公益社団法人 全日本仏教婦人連盟

〒151-0051

東京都渋谷区千駄ヶ谷

4-5-10-205

03-5772-0677 電話

<http://jbwf.jp> URL

info@jbwf.jp MAIL

本多良之師 表紙画

大師信仰と

子どもたちへの

教化

大本山川崎大師平間寺

貫首 藤田隆乗



全日本仏教婦人連盟の皆さまにおかれましては、昭和29年(1954)に創立以来、仏教精神における慈悲の心を育む、社会福祉活動に取り組まれておりますことに心から敬意を表します。

川崎大師平間寺は、古くより庶民信仰の寺院であります。正式名称は「金剛山金乗院平間寺」と申しますが、皆さま方からは「厄除けのお大師さま」と称され、毎年お正月の初詣には多くの参詣者をお迎えする寺院として知られております。

そもそも川崎大師平間寺の開基は、平安時代の末、尾張国の武士

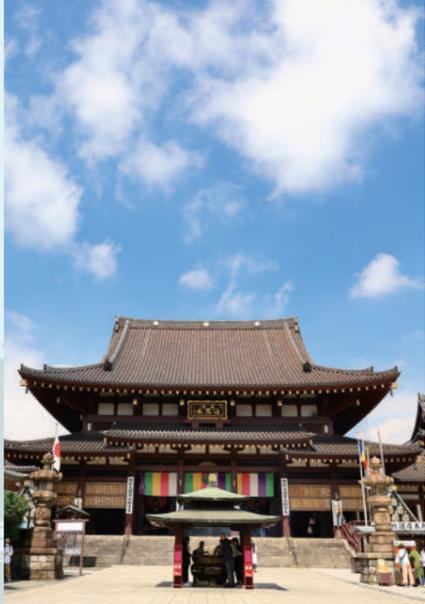
であった平間兼乗に由来いたします。兼乗は無実の罪により生国尾張を追放されてしまいました。その後、諸国を流浪した果てに多摩川の河口に近い川崎の地に居を定め、漁師として生活をはじめたのです。兼乗は、もとより弘法大師信仰に篤い人物でしたが42歳の厄年を迎え、ことさらに深くお大師さまを信心し、自身の厄除けを祈り日々を過ごしておりました。

ある時、兼乗の夢枕に高僧が現れこう告げます。「私は昔、自分の像を彫り、人々を救うという誓願とともに海中に放った。しかし未だ有縁の者に会えず海中をさま

よっている。お前はふさわしい者であるので、海へ出て私の像を引き揚げてもらいたい」。そこで、兼乗は海へと出て、海中の光輝く場所に網を投じます。網には一鉢の木像がかかり、それはまさしくお大師さまの尊像でありました。

その頃、諸国を遊化していた高野山の尊賢上人がこの地を訪れ「お大師さまは多くの方を救ってくださるのだから広く人々にも拜んでもらいなさい」と兼乗に勧め、庵を建てそこに海から引き揚げた尊像をお祀りすることになりました。その後、兼乗の姓をとって平間寺と号すことになったのです。

時が大治三年(1128)のことでした。時を経ずして、開山主である尊賢上人の姪が、鳥羽上皇の皇后である美福門院(藤原得子1117~1160)の乳母をしていたことから、平間寺の名は皇室に知られることとなります。平間寺の縁起を耳にした美福門院は、鳥羽上皇に事の次第を奏し、ご本尊・弘法大師に上皇とご自身の災厄消除、そして皇嗣のご誕生を願われたところ、ご懐妊されたこと伝えられています。この皇子が第76代近衛天皇でいらつしやいます。このような因縁から、永治元年



さて、平間寺には「大師幼稚園」「川崎大師日曜教苑」という青少年に教化活動をする場がございます。花の種運動として毎年、全日本仏教婦人連盟の皆さまより届けられますリーフレット「ひと粒の種」に添えられている花の種は、幼稚園園庭の一面に園児の手によって丁寧に植えられ、大切に育てられております。朝顔、コスモス、ひまわりなどが美しい花を咲かせ幼稚園を彩り、園児たちは自分たちで育てた花を背景に写真の撮影をして楽しみ、また、咲き終えた花から種を摘み取り、自宅のプランターに植え育てている園児もおります。子どもが花を育て自然に触れることを通じて、生命の尊さ、そして生命の力強さを学ぶ機縁となっております。

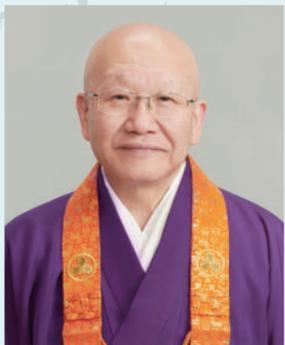
ご存じのように幼児期は将来にわたる人間形成の基礎を養う大切な時期であり、遊びや友人を通じて様々な体験をすることで心身ともに調和のとれた発達をもたらすことは言うまでもありません。家族はもとよりさまざまな人や生きものとのつながりの中で支え合って生きていること、いわゆる「共生」「共存」の精神、そして互いを思いやる慈しみの心を育むことが大切であります。

昨今、日本では少子高齢化や人口減少、教育格差、環境問題など多岐に渡る問題が存在し、仏教の

慈悲に基づく保育、教育の役割は愈々重要性を増しつつあると言えます。仏さま、お大師さまのご加護のもと愛情あふれる環境の中で、日本の未来を担うかけがえのない子ども達が成長いたしますことを心から願うものであります。最後になりますが、全日本仏教婦人連盟のご隆昌と会員皆さまのご活躍を祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

合掌

(1141)に近衛天皇の名をもつて、勅願寺の宣旨を賜りました。時は下り江戸時代になると、11代将軍徳川家斉公が41歳の前厄の時、平間寺は御膳所という将軍家公式の休憩所に指定され、家斉公が参拝に訪れることとなりました。しかし、家斉公参拝のまさにその日の朝、平間寺第34世隆圓住職が遷化されたのです。後にこの出来事は「家斉公の厄を、身代わりとなって引き受けた」と江戸中に広まり、徳川家をはじめ江戸庶民に厄除け大師の信仰が一層浸透することとなりました。さらには明治時代の初めに鉄道が開通したことを契機に、全国から多くの参詣者を迎えることとなり現在に至っております。



大本山川崎大師平間寺 貫首 藤田隆乗

昭和30年3月24日生まれ

略歴

- 昭和57年(1982) 大本山川崎大師平間寺入寺
- 昭和60年(1985) 大正大学大学院 文学研究科博士課程 仏教学専攻単位取得満期退学
- 平成16年(2004) 副執事
- 平成17年(2005) 執事
- 平成18年(2006) 第45世・中興第2世貫首就任

その他役職

- 真言宗智山派宗機顧問
- 真言宗智山派菩提院結衆集議

問

今(こ)こを

おいて

どこへ行く(こう)と

するのか

第2講

天地宇宙の真理に気づく——「仏戒」について

ようやくして本論に入らせていただきます。本書末尾に「十六条ノ戒法」を付してありますので、ご参照ください。

「お授戒」と申しますが、この「じゆかい」には「授戒」と「受戒」と二通りありますが、授ける方からいったら、戒を「さずける」の「授戒」ですし、受ける方からいいたら、戒をお受けする「受戒」となります。

しかしながら、いずれにしても、何かをもらったり、あげたりする話ではない。ということ、まずは心に止めておきましょう。

達磨大師は、お釈迦さまから法を相続して二十八代目。インドから中国へ禅をお伝えになりました。

この達磨大師の示された、『一心戒文』の中に、
受とは伝なり
伝とは覚なり
即ち仏心を覚するを真の受戒となす
という言葉があります。「受ける」ということは「伝える」ということ。「伝える」ということは「気づく」ということ。「仏心を覚するを真の

受戒となす」と。

「仏さまの身心を頂戴していたんだな」ということに気づくことであって、ないものを頂戴する、「ものをやりとりするのとは違うんだぞ」とおっしゃる。

「仏心を覚するを真の受戒となす」。仏さまになるのではなくて、仏さまであったことに気づく、そういうふうに着目していただくといいたいですね。わたしが生涯の師として仰いでおりました沢木興道老師の言葉に、「凡夫がぼつぼつ修行して仏になるんじゃない。はじめから仏さんなんだ。ただそのことに気づかず迷っているのを凡夫と呼ぶんだ。沢木老師がそうおっしゃったことを思い出します。

やはりわたしがお慕い申しあげておりました、教育者で兵庫の八鹿小学校の校長を最後に定年退職された東井義雄という先生のお話を思い出します。

東井先生は、愛の教育に生きた先

生です。教育のことを農家のお百姓さんにたえて、

下農は草を作り

中農は作物を作り

上農は土を作る

と。教育の畑の土づくりは家庭づくり、親づくりなんだと。作物である子どもを何とかしようと思っても、苗床である、土である家庭が、親がダメならダメなんだとおっしゃる。この頃、子どものいろいろな問題があります。大人に責任があると思わなければならぬと思います。

校長をお辞めになってから、教育の畑の苗床づくり、土づくりのために、全国を講演に歩いておられました東井先生、夜中に電話が入った。こんな夜中に誰が電話をくれたかと思つて、受話器を取つてみたら、男の方のせつぱ詰まった声で、

「世の中の人みんな、わたしを見捨てた。裏切った。生きてゆく勇気がなくなつたから、今から首をつつて死のうと思う。けれど、ひとつだけ気になることがある。『南無阿弥陀仏』を唱えて死んだら、救つてもらえるか」

物との二元です。

仏教の方は一つです。はじめから仏の御命をいただき、その御命をそれぞれの姿として命をいただいている。はじめから授かっている仏の命に気づくというので、「自覚の宗教」と呼ばれるゆえんです。それに対してキリスト教の場合は、創り主と創られたる者との「契約の宗教」と呼ばれています。

ちなみに、同じキリスト教でも、カトリックでは「神父」ですが、プロテスタントでは「牧師」といいます。この牧師というのは、創られたる仔羊が、創り主の神に背かないように神に代わつて牧することから、「牧師」と呼ぶのだそうです。

仏教では修行の十の段階を牛飼いにたとえた、『十牛図』という教えが牧する「牧牛」といいます。『十牛図』における牛は、わがままで、あしたい、こうしたいという自我のわたし。それが、仏の御命によって目覚めたもう一人のわたしによって牧されていく、このように受け止めることよろしいかと思ひます。

「授戒」(「受戒」)とは、ものやとりりではなくて、はじめからいただいている仏の御命、お働きに気づかせていただく、目覚めさせていただくこと、とまずはそのように受け止めていただきたいと思います。

青山俊董◎あおやましゅんどう



青山俊董 老師

愛知専門尼僧堂・特別尼僧堂堂長

昭和8年、愛知県一宮市に生まれる。5歳の頃、長野県塩尻市の曹洞宗無量寺に入門。15歳で得度し、愛知専門尼僧堂に入り修行。その後、駒澤大学仏教学部、同大学院、曹洞宗教化研修所を経て、39年より愛知専門尼僧堂に勤務。51年、堂長に。59年より特別尼僧堂堂長および正法寺住職を兼ねる。現在、無量寺東堂も兼務。昭和54、62年、東西靈性交流の日本代表として訪欧、修道院生活を体験。昭和46、57年、平成23年インドを訪問。仏跡巡拝、並びにマザー・テレサの救済活動を体験。昭和59年、平成9、17年に訪米。アメリカ各地を巡回布教する。参禅指導、講演、執筆に活躍するほか、茶道、華道の教授としても禅の普及に努めている。

平成16年、女性では二人目の仏教伝道功労賞を受賞。21年、曹洞宗の僧階「大教師」に尼僧として初めて就任。明光寺(博多)僧堂師家。

という電話だった。東井先生は、

「待つてください。あなたの気まぐれな『南無阿弥陀仏』ぐらいで救われるもんですか。そんなことよりも、あなたはまわり中が見捨てた、裏切つたと言っけれど、あなた自身が自分の命を裏切り、見捨てて、死のうとしているじゃないか。そんなときも、がんばって見捨てずに、生きてくれよ、乗り越えてくれよと、呼びかけ通しに呼びかけ、働きかけ通しに働きかけていくと、そのお声が聞こえないか」

「そんな声、どこにも聞こえやしない」「死のうとしているそのときも、あなたの呼吸が入りしているでしょう。あなたの心臓が動いているでしょう。死なせてなるものか、乗り越えてくれよ、とあなたの呼吸を出入りさせ、あなたの心臓を動かしてください。そのはたらきを仏というんじゃない。その他の、どこに仏がいると思うか」

とおっしゃった。「勘違いをしていたようだな」と言つて電話の主が電話を切った、というお話を思い出します。

わたしがこうしてしゃべっている間も、なんとも思わなくとも心臓が動いている、呼吸が入りしている。今朝、頂戴したものをきちんと消化している。みなさんにお聞きいただ

いている間、一分間にいくつ心臓を

打たなきゃならない、と思わなくても、ちゃんと動いてくれています。生きるための努力の何一つもしていないで眠りかけている間も、生かしながら生きてくたさっている。その働きを「仏」と呼ぶのです。

自分の気づかないところでの大きな働きをいただいで、お互いの二十四時間の命の営みのすべてができていく。その働きを目覚めさせていただく。その働きをいただいでいく自分の命の姿に気づかせていただくこと、これが「気づき」ということなのです。

何に気づくか。はじめから授かっている仏の御命、仏の御働きをいただいで二十四時間、その命の尊さに気づく。それがお授戒の「授」という意味なのです。

「受とは伝なり、伝とは覚なり」と。そういう命の本来の姿、仏の命、仏のお働きをはじめから頂戴している、そのことに気づかせていただく、それが受戒の「受」という意味なんです。仏になるのではなく、すでに仏である自分に気づかせていただくということ、まず受け止めていただくかと思ひます。

第一講でお話ししたように、キリスト教の場合は、「創造の神」、唯一神の創造の神をたて、創られたる万

「ほとけさまのサイン」

編集・発行 天台宗出版室

浦井正明師：「阿弥陀さまはなぜ九ツもの印相を示しておられるのか。お不動さまはどうして怖い顔をして、剣などをお持ちなのか。本書はこうした疑問にお答えするために書いたものである。(中略) 仏さまは本来拝まれるために造られるのである。いいかえれば、私たちが仏さまに何を願ひ、仏さまはそれにどう応えてくださるかということなのである。」

著者略歴

【浦井正明(うらいしょうみょう)】

昭和12年東京生まれ。天台宗僧侶。東叡山輪王寺門跡門主・寛永寺前貫首。慶應義塾大学文学部史学科卒業。東叡山現龍院前住職。寛永寺執事長、台東区教育委員会委員長、台東区文化財保護審議会委員等を歴任。『もうひとつの徳川物語 将軍家霊廟の謎』等著書多数。

図2



真言宗豊山派 初音山観智院 初音六地藏



図1

大仏師 山高龍雲作

ほとけ
さまの
サイン
Sign

大地の恵み

故郷の村を歩いてみると、よく石のお地藏さまにお会いします。また、四ツ辻やお寺の境内では、六地藏さまと呼ばれる六鉢のお地藏さまをお見受けします。

このように、お地藏さまは数多い仏さまの中で、もつともよく知られた菩薩さまであると同時に、もつとも多く造立された仏さまでもあります。

さて、お釈迦さまが亡くなられてから、五十六億七千万年後に弥勒さまがこの世に下生してくださるまでの長い間、一体どなたが、この世に在って、私たちを救って下さるのでしようか？

実は、それはこの地藏菩薩さまなのです。そうしたことから、お釈迦さま、お地藏さま、弥勒さまのことを、過去世、現世、未来世の三世の仏さまとしてお祀り申し上げることもあります。

お地藏さまはサンスクリット語で「クシテイ・ガルバ」というお名前ですが、それは大地が内蔵しているさまざま生命力や恵を象徴した呼び名なのです。

いいかえれば、大地が全てのもの

さて、お地藏さまにはいろいろなお姿がありますが、普通もつともよく知られているのは、図1のように、僧形をして右手に錫杖を持つお姿です。錫杖は私たちのために、処々を遍歴される時の杖であると共に、その錫杖の音によって、毒蛇や害虫が逃げるように、私たちの心の迷いを払って下さることを意味しているのです。また、宝珠は、如意宝珠ともいうように、意の如く私たちの願い事を叶えてくれる宝の珠というわけです。

六道を救う

六道輪廻という言葉をごぞんじでしょうか？

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上という、六つの世界を六道といひ、私たち人間をはじめ、生きとし生けるものがみな苦しみ、悩みながら、この六つの世界に生き死にを繰り返していることをい言葉です。そして、この輪廻を繰り返して

を生み育むように、お地藏さまはあらゆる所に姿を現して、私たちを守り、救って下さるといいうわけなのです。そういう意味で、天空を司る虚空蔵菩薩さまと一對の仏さまとしてお祀りされることもあります。

お坊さんのお姿

ところで、この地藏菩薩さまには、他の菩薩さま方と全く違った特徴があります。それは、皆さまよくごぞんじの頭を丸め、墨染めの法衣をきたお姿をしておられることです。

他の菩薩さま方が、インドの貴族のように、首や手や胸に、沢山の瓔珞(装身具)をつけ、頭も髻に結っておられるのとは違って、地藏菩薩さまはお坊さんと同じ格好をしておられるので、本当に誰にでも親しみやすいお姿なのです。そして、このお姿こそ、お地藏さまが、自分が如来になることをやめて、私たちに共にこの現世にとどまって、共に歩みながら、私たちを守り、救って下さるといいう大きな願いを表わしているのです。

いる私たちを、お釈迦さまの時代と弥勒さまの時代の狭間に当る、五十六億七千万年の長い間、お地藏さまがお守り救って下さるといいうわけなのです。

こうした意味から、図2のように、六地藏さまがお祀りされるようになったのです。

六地藏さまが、六つの違ったお姿に造られるのも、それぞれの地藏さまが、地獄界から天上界までの六つの世界のそれぞれを責任もって分担されていることを表わしているのです。

こうしたことから、お地藏さまのことを「六道能化」の菩薩さまと申し上げるのです。六道能化とは、六道に迷うものを、よく導き、救って下さるといいう意味なのです。

もつとも、六鉢それぞれ違ったお姿のお地藏さまとはいっても、本来はまったく同じ一鉢のお地藏さまなのです。

それはちょうど私たちが、時と場合にあわせて、服装や持ち物、さらには話そのものの内容を変えて、その場その場に合うように努めているのと同じです。

公益社団法人 日本仏教婦人連盟

第13回総会開かれる並びに 第38回理事会開かれる

公益社団法人全日本仏教婦人連盟第13回総会並びに第38回理事会開かれる

2025年6月18日(水) 11時より浄土真宗東本願寺派本山東本願寺にて全日本仏教婦人連盟第13回総会が開催されました。

午前11時より御本堂において本多氏の司会、東本願寺讃衆による勤行が行われ、次に執務長羽部大仁師によるご法話がありました。本願寺のご本尊は阿弥陀如来立像です。



お浄土から自ら私たちを救いに来られたお姿です「我が名を唱えて来れ」とお呼び下さいました。「本願を信じ念仏を申せば仏になる」すなわち阿弥陀仏の仰せを信じ全て阿弥陀仏におまかせして、唯念仏を称えると阿弥陀仏の浄土に生まれさせていただき、美しい仏となるのです。心臓が動いているのも他力、目には見えても本当の目ではないのです。「西方弥陀の浄土から、至心の鳥が飛んできて、南無阿弥陀仏と私の心に巣を作り、南無阿弥陀仏と唱えてくれる」全てが自力でなく他力であると、他力本願の説明をわかりやすくお話しされ、一同は聞き入りました。

記念撮影後、慈光殿「梅檀の間」に移動して、桶屋氏の発声にて全員で食前の偈、食後の偈をお

称えし、昼食のお弁当をいただきました。

午後1時より「蓮の間」において総会が行われました。梨本副理事長により開会が宣言され、日比野師先導で三帰依文をお称えしました。次に花岡理事長の挨拶に続いて海老塚氏が議長に、議事録署名人は大橋、日比野氏が選出されました。

決議事項として、第一号議案 2024年度収支決算 第二号議案任期満了に伴う理事・監事選任の件

第一号議案 2024年度事業報告は松井氏、同収支決算は大橋氏より報告され高崎氏の監査報告の後、木村氏が補足を説明し、承認されました。

第二号議案 理事、監事の選任が行われ、理事11名は花岡眞理子、梨本三千代、本多端子、遠

賀令子、海老塚るり子、桶屋良法、米田陽子、大橋百合子、松井百合子、村主みや子、湯浅正江氏、監事2名は木村匡成、高崎悦子氏が選任承認されました。

報告事項 2025年度事業計画は遠賀氏、同収支予算は米

田氏より報告されました。

午後2時15分議長が閉会を宣言しました。

引き続き、午後2時30分より第38回理事会が同会場で行われ、花岡氏が議長になり、新理事の出席によつて開かれました。新理事の中から本多氏が理事長に遠賀氏が副理事長に、続いて花岡、梨本、海老塚、桶屋、米田氏の5名が常務理事におのおの選定されました。(次頁記載)

新本多端子理事長が今後の事業への協力を役員はじめ会員に要請致し進めていきたいと挨拶されました。

以上をもって、午後3時15分議長が閉会を宣言しました。



日本寺は
生まれ変わろうと
しています。応援よろしく
お願いいたします。



インド 日本寺 報告

日比野郁皓



印度山日本寺を運営する（公財）国際仏教興隆協会の役員、佐藤雅彦師、逸見道郎師、正本光生師、奈々師、現地役員のトゥン氏、私、合計六人で、二月十八日から二十一日まで日本寺及び現地法人の視察のためにインドブダガヤの日本寺を訪問しました。

日本寺創立五十年と、仏教学東洋研究所図書館の落成式典に、全日本仏教婦人連盟のツアーが参加してから、一年になります。今回は本堂、会館、菩提樹学園、講堂、新旧図書館、すべての建物を調査し、欠損箇所、老朽箇所の修理方法や長年の不用品の処分など改善対策を練りました。また、日本寺の現地役員や約三十人の職員とも話し合いの場を持ちました。聞くところによると、ブダガヤ周辺は、人口五万二千人中八十%がアウトカーストであり、治安の悪い地域ということ。周囲の寺院には泥棒が入るのでガードマンが欠かせないそうですが、日本寺は一度も被害に会っていません。理由はこの地は菩提樹

学園（無料幼稚園）卒園生が多いのでお世話になった日本寺を大切に思っているからだそうです。光明施療院では資金不足状況でしたが、現在大塔委員会の運営で週末の医療が行われ、現地の人々に貢献しています。今回は、医師助手と会談しました。私たちは先輩方の建てられた光明施療院の建物をこれから大切に維持管理する責任があることを痛感いたしました。

現在、菩提樹学園屋根防水工事、本館建物貯水槽及び配管交換工事、防犯カメラ十六台中八台設置、モニター設置、新図書館へ図書館事務所、書籍移動、シロアリ駆除などがおこなわれています。



現地日本寺で働く若いインド人スタッフたちは、日本寺に誇りを持っていきます。重労働にも文句を言わず、嬉々として働き、日本寺を良くしたいと、前向きにごみ運びや部屋の清掃をはじめました。

朝の勤行は駐在僧が、朝礼は全員で毎朝行われていますが、今後は、ネットで日本とつないで朝礼を行う予定にしています。現地インド人のスタッフを応援してあげてください。

生まれ変わろうとしている日本寺にたいし、今後とも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。



公益社団法人 全日本仏教婦人連盟 役員

2025年6月18日より2年間

役職	氏名	所属
会長	東伏見具子	天台宗
副会長	加用稔子	浄土宗
副会長	吉田真理	真言宗御室派
相談役	岡野鄰子	孝道教団
顧問	林恵智子	臨済宗妙心寺派
参与	末廣久美	天台宗
参与	鈴木トヨ子	真言宗智山派
理事長	本多端子	浄土真宗東本願寺派
副理事長	遠賀令子	天台宗
常務理事	花岡眞理子	真言宗智山派
常務理事	梨本三千代	真言宗豊山派
常務理事	海老塚るり子	真言宗智山派
常務理事	桶屋良法	念法眞教
常務理事	米田陽子	天台宗
理事	大橋百合子	真言宗智山派
理事	松井百合子	曹洞宗
理事	村主みや子	真言宗中山寺派
理事	湯浅正江	天台宗
監事	木村匡成	公認会計士
監事	高崎悦子	浄土宗



このたび理事長に就任いたしました
本多端子でございます。

前花岡理事長には2期4年にわたりコロナ禍の中、何時も慈愛豊かな心で私たち会員を導いてくださり多大な功績をお残しになりました。その理事長の後任に甚だ恐縮ではございますが、皆様からのご推挙をいただきましたので理事長職を再度お引き受けいたしました。当連盟は、昭和29年創立以来『仏教精神』をつちかい慈悲の心、人の気持ちのわかる人間を育成するとともに様々な社会福祉事業に取り組んでおります。先達方々のご努力や、ご教示を引き継がなければならないと身の引き締まる思いでいっぱいでございます。

昨今の世情に目をやりますと、政治不安や今でも戦争が止むところなく五濁悪世そのものです。このような時代だからこそ宗教や仏教の役割が重要であると深く感じるところでございます。このうへは、信条に「私たちは集いの力を信じて働きましょう」とありますように、東伏見具子会長のもと役員並びに会員の皆様のご協力をいただき、一致団結して『仏教精神』に則り社会の平和と仏教婦人連盟の発展に力の限り精進いたしたく存じます。何時も私たちの活動に深くご理解、ご協力、ご支援を頂いております賛助会員の皆様、各関連団体の先生方におかれましても今後ともどうぞご指導ご鞭撻を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。就任の御挨拶とさせていただきます。

合掌

京都仏教 セミナー

45名の方が
参加されました。

5月22日(木)

報告① 本多 端子

京都は、平安京が造営されて以降、千年以上も日本の首都として栄え、文化・経済・政治の中心地としてユネスコによって「古都京都の文化財」として登録されており。

全日仏婦は毎年京都仏教セミナーと題しこの地を訪問し伝統仏教文化を研修致しております。今回はご皇室のご親類関係にあられる東伏見会長の特別のお計らいにより、京都御所や京都迎

賓館も見学させていただきました。京都迎賓館は平安建都千二百年記念事業として京都府、経済界一体となり誘致要望活動が行われ、国において平成十七年に建設されました。建物や調度品には、数寄屋大工、左官、作庭、きりかみ截金、西陣織など、数多くの京都を代表する伝統技能が用いられております。日本建築の長い伝統の粋と美しさを現代の建築技術と融合させる「現代和風」の創造には、目を見張る出来栄えで参加者一同ため息のするばかりでございました。

美味しい昼食の後、会長の自坊青蓮院門跡並びに將軍塚青龍殿も参拝させていただきました。青蓮院門跡は天台宗総本山比叡山延暦寺の三門跡の一つに数えられ古くより皇室と関わり深く格式の高い門跡寺院とされております。京都市の天然記念物に指定されている門前の「クスノキ」は周囲の地表は苔で覆われ、数百年の樹齢を保って、寺院の景観に溶け込みながら今も時代の重みを感じさせて悠々と新緑の枝葉を茂らせて見事なものでした。將軍塚は

桓武天皇は都を奈良から京都にお移しになりましたが、和氣清麻呂は天皇をこの將軍塚の山上にお誘いし、京都盆地を見下ろしながら、都の場所にふさわしい旨進言しました。天皇はその勧めに従って延暦十三年(794年)、平安建都に着手されたのですが、正に平安京原点の地を訪問させていただき眼下に広がる京都の風景に伝統文化の清々しい風を感じ心が洗われました。特に京都文化財の建物を移築された青

龍殿の青不動明王をお参りさせていただき、この濁り多き世に生まれながら、仏教のご縁に会わせていただいた有り難さに感謝の思いしきりのセミナーでございました。

報告② 宮川 俊子

歴史文化芸術の京都に仏教を礎とした精神を实践日々邁進されている全日仏婦の皆様とご

京都迎賓館 / 夕映の間



京都迎賓館 / 聚楽の間



俵屋吉富菓子資料館



学。伝統技術の粋が建物から調度品細部に至るまで施されており、本物の持つ圧倒的な精巧さと制作者の心意気を感じ、日本人である誇りと喜びが心に満ちてまいりました。

りをもって紹介できる技でした。その後の青蓮院門跡にお伺いしたのは、十年以上も前の平成二十五年十一月でしたが、雨の降る日に宸殿のなかでの集合写真、その後の好文亭でのお茶、青不動が思い出に残っております。

ございました。気さくなお人柄の門主様によるご説明はわかりやすく皆笑顔で聴き入りました。將軍塚青龍殿の大舞台はなんと清水の舞台の約5倍！京都市中を一望し、果ては大阪滋賀までの眺望は圧巻でした。

歴史あるものを目にしているうちに、未来の日本に目を向けている自分に気づきます。その歴史の根底に流れる仏教の教えは、未来の一人一人の光となることを強く感じた一日となりました。

今回、宸殿のなかでのご門主による講義、その後龍心池を回遊しての拝観で築地の中から外周を拝観でき親鸞聖人手植えの楠の樹などを垣間見えたのは感激でした。

報告③ 大堀 カヨ

京都御所、京都迎賓館を拝観し、伝統工芸の粋を集めた造作は赤坂迎賓館とも違った素晴らしさを改めて見開かされた時間でした。

朝一番の京菓子資料館もそうでしたが、日本の職人の緻密な細工や感性が見事に表現され誇

青蓮院門跡



さて時を巻き戻し、セミナー最初の訪問は老舗菓子店「俵屋吉富」のお茶席でお抹茶と生菓子を頂戴し、京菓子文化を伝える資料館を見学。糖菓子のディテールの精密さ色彩の美しさに驚きました。記録帳面には和菓子のとりにどりが美しく正確に描かれており、当時の優雅な時間を大切にした日本人の美意識を強く感じ入りました。その後、京都御所外観を巡り、厳重なセキュリティの中、迎賓館を見

ました。美味しい昼食の後、会長の自坊青蓮院門跡並びに將軍塚青龍殿も参拝させていただきました。青蓮院門跡は天台宗総本山比叡山延暦寺の三門跡の一つに数えられ古くより皇室と関わり深く格式の高い門跡寺院とされております。京都市の天然記念物に指定されている門前の「クスノキ」は周囲の地表は苔で覆われ、数百年の樹齢を保って、寺院の景観に溶け込みながら今も時代の重みを感じさせて悠々と新緑の枝葉を茂らせて見事なものでした。將軍塚は

その後に「門主自ら「青龍殿」をご案内くださり、東山から京都一望のできる大舞台での集合写真はこの研修の記憶に残る出来事でした。大阪から奈良までの素晴らしい眺望は何にも勝る景観でした。今日一日が晴れに恵まれたのも、ご門主様のお話による青不動明王には調伏・息災といつて悪行や煩惱を滅ぼし、魔性を払う強大な力がある等のお話が、今回のセミナーでの閉めになったかと思えました。

私は、京都迎賓館は二度目の来館でしたが、今回は案内の方より各所を丁寧に説明していただきました。

素晴らしい、藤の間、桐の間、聚楽の間、夕映の間、庭園など見て廻り感じた事は、伝統技能



將軍塚青龍殿大舞台



者の技を活用し(十一種類)多くの調度品を配置(十四種類)しているところでした。特に、桐の間の座卓(漆)、全長十二メートル漆の一枚仕上げの座卓と座椅子(蒔絵)、座椅子の背面には五七の桐が描かれています。伝統工芸とはいえ現代ではなかなか引き継がれる事も難しいとも伺っております。

この京都迎賓館の中だけでも伝統工芸を残し、素晴らしい姿を未来の子供たちに伝えてもらいたいと思います。雨の予報でしたが晴れて過ごす事が出来ました。ありがとうございました。

京都仏教セミナーに参加させて頂きまして、コロナ禍を経て5年振りに京都を訪ねました。

京都天宗五ヶ室の一つであります青蓮院ご門跡をお尋ねする頃には、朝からの小雨も上がり薄陽が差し来ておりました。

門跡の大楠や土塀の五本の筋の由来は、セミナーに参加致しまして初めて知り得た事です。

セミナーの皆様と本堂に移りまして、青蓮院ご門主から青蓮院建立と古くより皇室との繋がりが深い

お話をお聞きしまして、皆様感慨しきりのご様子でございました。

お話の後は広い寺院内と奥深いお庭の散策を致しました。色鮮やかな襖絵や大名家の長持、見事な紅葉の古木、豊太閤寄進の一字字手

水鉢などを拝見しまして、これからも何百年と続く青蓮院ご門跡の過去現在未来の通過点にいられる事をとても有難く感謝致しました。

その後、ご門跡よりバスで10分程の東山山頂の將軍塚青龍殿に参拝致しました。

外階段を上りました先には、木造の大舞台が広がり、遠く大阪のあべのハルカスまで望む展望にしばし言葉を失ってしまいました。

青龍殿の奥殿に安置されます国宝の青不動のお前で、ご門主の法話を伺いました。

お話の中で青不動明王たる由縁、背後の火焰の中に七羽の火の鳥「迦楼羅」が描かれている由縁をお聞きして、手を合わせておりますと、心の中の澱が払拭された気が致しました。

お話の後は大舞台に戻りまして今回のセミナーの記念の集合写真を撮り、青龍殿を後に京都駅に向かいました。

永く心に残る京都仏教セミナーに参加させて頂きまして、ありがとうございました。

Reports of Cultural lectures

文化講座報告

知識や教養だけではなく、実のある生き方を教示された

“仏さまの智慧”を学ぶことを目指し、

様々なジャンルの講師の方を招いて開催している文化講座です。



第133回文化講座

「一陽来福」

4月16日(水)午後2時~

【講師】曼荼羅美術館館長 小峰和子氏

【場所】谷中天王寺

去る4月16日、第133回文化講座が「一陽来福」と題し、真言宗智山派観蔵院寺院、曼荼羅美術館館長の小峰和子氏をお迎えし開催されました。

小峰氏は、大正大学オープンカレッジで仏画の講師をお勤めになりながら世界各国を訪れ、その地の文化芸術に肌で触れ世界の方々と交流を深めています。

講座はご自身が結婚をされたその当時のお話から始められ、当時は女性が外へ出て行くことすら憚られたことや、ご息様からの飛行機のチケットのプレゼントを切

掛けの世界を飛び回るようになられたこととお話しされました。

「一陽来福」は本来、「福」の字は「復」と書き陰が極まった後に陽が戻ってくるという意味から、良くないことが続いた後には必ず善いことが来ると解釈されます。小峰先生も結婚してからの苦労は、今思えば一陽来福だったと話されました。ご縁もどんなに素晴らしい「ご縁」であつてもその「ご縁」を捉える方によって善くも悪くもなるものだから、善い方に捉えること。また、夢は大きく持ち、その夢が叶わなくてもその夢に近づくことができる、とお話されました。

また、暦の二十四節気は中国の中原(中華文化発祥地)の気候をもとにしているので、日本の季節感とは合わず日本の気候に合った七十二候の言葉にも触れられました。

一年三百六十五日を五日ごとに区切りその四季折々の風雨、花や鳥、昆虫に至るまで自然やいのちの営みを言葉に表したもので、



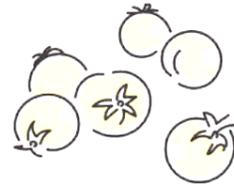
日本人の感性の豊かさを再認識いたしました。

ご講演の副題には「世界平和は文化交流から」とあり、まさに先生が実践されてこられたものです。

講演中には写し出された先生自らが撮りになった写真の数々から、文化芸術を通して世界の各国の人々と交流をされてい

るお姿に感動をいたしました。文化講座にあたり、ご多忙の中ご講演をいただきました小峰先生には、参加者一同心より御礼申し上げます。

海老塚 るり子



食品ロスを無くそう

ありがとうの気持ちを大切に



食品ロスは、食材や食品の無駄に留まらず、
温暖化や貧困と飢餓の未来につながります。
買い過ぎない、上手に保存する、寄附をするなど、
食品ロスは減らせます。そして、めぐりめぐって
今いただく食への感謝を大切に。



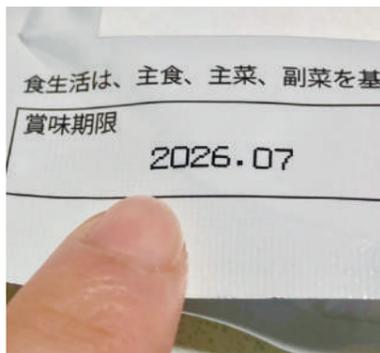
浄土宗長福寺住職
中央大学共同研究員

窪川香薫

今年も暑い日が続きます。

6月の衣替えは旧習となるでしょう。温暖化が急速に現実となつていきます。暑さは、農業や漁業に不作や不漁をもたらし、生鮮食品や食材の保存を難しくし、食品ロスにつながる大敵です。

食品には賞味期限と消費期限があります。賞味期限はおいしく食べられ、消費期限は安全に食べられる期限ですが、買い物の時でも料理の時でも数字が目がいきます。筆者の場合、消費期限が1日過ぎ

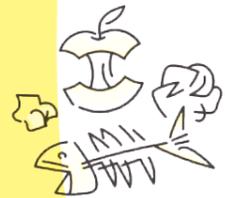


たら、見た目や匂いで評価して、でもたいていは食べています。もちろん、お店では売れません。期限内でも、適切に保存したり、開封したら、期限は無効になるので食品ロスにつながります。

食品ロスは、生産、流通、販売、消費（外食、家庭）のどこでも起きますが、約半分が家庭由来です。一人お茶碗1杯、150グラムが一日に、年間で38キログラムが廃棄されています。これだけの食品

ロスをゼロにすれば、生産から消費までにかかった費用を無駄にせず、廃棄費用も無くします。さらに、持続可能な地球の未来につながります。すなわち、温暖化の抑止、貧困と飢餓の防止につながります。

家庭から廃棄された食品は、焼却され、残渣は埋め立てられます。焼却で排出される二酸化炭素や埋め立てから出るメタンガスは温室効果ガスと呼ばれ、温暖化の原因となります。2022年に世界で廃棄された食品は10億5千万トンにのぼり、それらに関連する温室効果ガスの排出は、世界全体の排出量の8〜10%にもなります。食品ロスを抑えることは、温暖化の抑止につながるのです。



NEW 花の種 新リーフレット制作中

今回新しいリーフレットを作成するにあたり、当連盟の窪川かおる会員にご協力をお願いし、全佛婦140号では「温暖化と私たちの生活」、そして今号は「食品ロスをなくそう」をテーマに「食」が地球規模の環境に影響することを説明していただき、その上で私たちに何ができるだろうと考えてまいりました。

「食」から考える地球環境

現在世界中で危機が懸念されている地球規模での気候変動や温暖化などの問題は、私たちの生活にも直接影響します。私たちは何を知り、どのように行動していけば良いのでしょうか。

平成16年度より「花の種運動」として花の種を配布して参りました。平成26年度からは「子どもたちの未来のために」と環境運動に取り組み、「命を大切にしよう ひと粒の種」のリーフレットを作成し、水をテーマに「水は宝物」、海洋プラスチックをテーマに「海はひとつ」と作成してまいりました。

私たちにできることは何？

一方、日本では、子どもの貧困や欠食が問題となっております。全国で1万カ所を超える「子ども食堂」には、企業や個人の食品寄附が欠かせません。廃棄せずに寄附するフードバンクの企業や自治体

は全国で215以上になっています。寺院ならではの「おてらおやつくらぶ」も活動が拡大しています。ところが、2025年の米の値上がりや備蓄米の放出は、日本の食の未来への不安をかき立てました。米の不作の原因のひとつは、2023年の異常気象による不作だと言われています。猛暑や豪雨の発生は温暖化に起因し、今も続いています。日本の未来のためには、米だけでなく、食

人の手を経て口にします。その食べ物は私たちが通りまた地球の循環に戻っていきまます。食べ物を無駄にせず、大切に思い、感謝することで自然の一部である私たち自身も大事にするきっかけになれば良いと考えました。

新リーフレットでは絵本や雑誌だけでなく様々な媒体でご活躍のイラストレーター橋本豊さんのご協力の元、制作中です。



Profile



橋本 豊
はしもと ゆたか

1975年埼玉県所沢市生まれ。日本大学芸術学部美術学科卒業後、広告デザイナーを経てイラストレーターに。趣味は修理、帽子、いつまで経っても弾けないウクレレなど。

【Instagram】https://www.instagram.com/yutaka_hashimoto_
【note】 https://note.com/yutaka_hashimoto



開発途上国は、別の理由で食品ロスが起きています。作物を収穫する技術が不足していたり、保存設備や加工設備がないために腐って廃棄するなどです。そして、いつも世界のどこかで飢餓が生じています。世界の人口は2050年に97億人、2080年代半ばには103億人に達する見込みです。このままでは栄養不足や飢餓の増加が予想されます。



料の自給が重要で、温暖化の抑止は喫緊の課題なのです。飽食はすでに昔話です。世界で食品ロスの削減に取り組む国はまだ少ない中、日本は積極的に取り組んでいます。日常的には仏教の食作法をすることは稀ですが、私たちは、食をいただく感謝の気持ち、和食や精進料理の伝統、餓鬼道の理解など、食品ロスを無くすための仏教の道理をたくさん持っています。食品ロスの削減を、気負うことなく、毎日の当たり前にしたしたいと思います。

感謝



大阪府佛教会創立60周年記念事業

第47回

全日本仏教徒会議

大阪大会

無量の「いのち」

すべてのいのちを慈しむ

日程：2025年9月5日(金)6日(土)

会場：ホテル日航大阪

〒542-0086 大阪市中央区西心斎橋1丁目3-3

主催：大阪府佛教会 共催：公益財団法人全日本仏教会

後援：公益財団法人仏教伝道協会 大阪市仏教会 大阪府佛教青年会

大阪市仏教会社会福祉委員会 大阪青少年教化協議会 大阪市仏教青年会



大阪府佛教会

Letters from scholarship students

あおぞら奨学基金



皆様のあたたかいご支援が
こんなにも役立っています!

全国青少年教化協議会との共同事業で、東日本大震災（平成23年・2011年）で被災した進学や就職を希望している高校生の授業以外に、必要な学習費用を1年12万円（1か月1万円）支給してきました。昨年度より能登半島地震にて被災した生徒を支援しております。当連盟では現在9名の高校生を支援しています。これまでに31名の生徒が卒業し、社会で活躍しています。皆様の温かいご支援を宜しくお願い致します。お便りが届きましたのでご紹介いたします。

卒業感想文

男子

いただいた奨学金は、参考書や資格取得の代金、そして部活動の費用に使わせていただきました。私の家は母子家庭ということもあり進学と就職で悩みましたが、高校生1年生の時から目標としていた建築学部のある大学へ進学することに決めました。
部活動では、ボート部に所属していました。高校入学から新しく始めた競技で思うようにいかないこともたくさんありましたが、ですが全国大会を目標に、部活動後は毎日チームメイトと学校に残り自主トレーニングをしました。結果は実らず東北大会出場で終わってしまったのですが、チームメイトとの思い出は忘れることのできない、とても良い思い出となりました。また、チームメイトと協力し合う協調性や毎日きついトレーニングに耐える忍耐力が身につく、成長することができたと思います。

もう一つの思い出は文化祭や体育祭などの学校行事です。文化祭ではクラスでたこやきの模擬店をやりました。どんなふうにしたら来てくださった人達を楽しませることができるとかを考え、工夫し、教室には、小さな子が喜べるようにたくさんさんの装飾をしました。当日はたくさんの人に喜んでもらうことができたので、とても嬉しかったです。また、クラスで目標にしていた金額にも達することができました。
そして最後は体育祭です。体育祭では、ソフトボールとバレーボールの競技に参加しました。ソフトボールは毎年出場していて、2年連続優勝していたので今年も優勝するつもりで、放課後はみんなで集まって練習をしました。しかし結果は準優勝と悔しい結果でしたが、楽しく体育祭を終えることができたので良かったです。

これからは私も困っている人を助けることのできるような大人になりたいと思います。

卒業感想文

女子

令和6年に起きた能登半島地震は私たちの生活に大きな影響を与えました。学校が休校になり家族の生活にも不安が広がる中、学業を続けるために支援金をいただけることになり勉強に集中できる環境をとり戻すことができました。

これから社会に出ていく中で、支援してくださった方々に感謝の気持ちをどう伝えるべきかを考えると、恩返しの方法がわかりません。しかし、私ができることは学んできたことを活かして社会に貢献することだと感じています。自分の成長を通じて、少しでも皆様の期待に応えられるよう、これからも精一杯努力していきます。



- 5月** May
- 12日 監査会(事務局)
 - 13日 第37回理事会(代々木会議室)
 - 15日 (公財)全日本仏教会第47回理事会(オンライン会議)
 - 20日 全日本仏教青年会全国大会(シエラトン都ホテル大阪)
 - 22日 第134回文化講座(京都御所、京都迎賓館、青蓮院門跡、將軍塚青龍殿)

- 4月** April
- 1日 「沙羅の樹」21号発行
 - 3日 花まつり法要(雑司ヶ谷鬼子母神堂)
 - 8日 京都仏教会花まつり(ANAクラウンプラザホテル京都)
 - 16日 第1回運営委員会(天王寺)
 - 24日 133回文化講座(天王寺)

仏婦 NEWS抄

私たちの日々のあゆみ
2025年4月～7月



- 6月** June
- 10日 第二百五十九世天台座主傳燈相承祝賀会(ウエスティン都ホテル京都)
 - 12日 編集会議(権寺)
 - 13日 (公財)日本宗教連盟評議員会(オンライン会議)
 - 18日 第13回総会(浄土真宗東本願寺派本山東本願寺)
 - 19日 第38回理事会(〃)
 - 24日 (公財)国際仏教興隆協会第18回評議員会(会議室)
 - 24～27日 念法真教主権サイパン慰霊法要
 - 26日 仏法興隆花まつり千僧法要(奈良・東大寺)

私たちの事業
「女性の立場」から「仏教精神」をつちかう

写経運動
写経の功德を説き、広く一般の方に勧めます。写経をインドの日本寺に納経。日本寺の光明施療院は母子保健衛生教育のための施設となり、写経の奉納金は運営費となります。

被災者に寄り添う
【あおぞら奨学基金】被災高校生の教育支援を行っています。
【災害時の救援活動】

子供たちの未来のために
【自然環境】環境問題の有識者のご意見を機関誌に掲載し、花の種3万袋を配布して、環境問題の大切さを喚起します。
【子供の環境】保育園などの教育施設や「こども食堂」から得た子供たちの現状を訴えます。

伝統文化を学ぶ
【文化講座】「日本の伝統文化」や「仏教の教え・智慧」の講座を開きます。
【寺社めぐり】「寺社を参拝して仏教を学ぶ」を目的にしたツアーを開催しています。

ほか、機関誌「全佛婦」・「沙羅の樹」を各々年2回発行しております。ホームページ・フェイスブックもご覧ください。

全日本仏教婦人連盟

information

- 7月19日(土)
- 8月2日(土)
- 8月4日(日)
- 9月5・6日(金・土)
- 10月21日(火)
- 12月12日(金)

石巻市渡波小学校放課後児童クラブ夏祭り交流会(宮城県)
念法真教立教百周年報恩大法要(大阪・総本山金剛寺)
比叡山宗教サミット38周年「世界宗教者平和の祈りの集い」
第47回全日本仏教徒会議大阪大会
9月に第135回文化講座予定
第72回全日本仏教婦人連盟大会
会場：東京プリンスホテル「サンフラワーホール」
第37回成道会の集い 会場：有楽町マリオン朝日ホール



比叡山ドライブウェイより望む京都方面

【発行人】本多端子
【編集】日比野郁皓 末廣綾 山口偉理子
【デザイン】中野 妙(合同会社まに)

事務局 だより

全日仏婦事業に多くの方々よりご協力いただきありがとうございます。それぞれの活動に運用させていただきますので、どうぞ今後ともよろしくお願いたします。(順不同・敬称略6月25日現在)

▼**賛助金にご協力の方々**
曹洞宗 浄土宗
真言宗豊山派 念法真教
浄土真宗東本願寺派 天台宗
日蓮宗 真言宗須磨寺派
真言宗大覚寺派 真宗木辺派
法華宗陣門流
総本山知恩院 妙法院門跡
青蓮院門跡 三千院門跡
日光山輪王寺 中宮寺門跡
圓照寺門跡 大雄山最乗寺
大本山川崎大師平間寺
大本山護国寺
聖観音宗浅草寺
大本山増上寺
大本山高尾山薬王院

▼**ご芳志を頂きました方々**
日比野郁皓 木田正子
本多端子 桶屋良法
松井百合子 末廣綾

▼**写経運動にご協力の方々**
日比野郁皓 大橋百合子
大橋聡衣 高山俊子
栃澤元子 田中美恵子
市川千恵子 山岸香江
春山葉子 折笠良子
猪瀬三枝子 手塚せい子
松浦一美 五月女恵子
村上和之

大本山永平寺 大本山總持寺
大本山池上本門寺
本山大坊本行寺 孝道教団
天王寺 總持寺 妙清寺
慈眼寺 梅窓院
大須観音寶生院
西新井大師總持寺
回向院 光明院 妙慶院
大聖院 正覚寺 長専院
傳通院 竹林寺 淨眞寺
東園寺 清岸寺 高岩寺
妙安寺
如宝寺(一財)京都仏教会
静岡県仏教会
弁護士柴田龍太郎
(株)大和証券